



平成25年度文化庁 文化遺産を活かした地域活性化事業

上廣歴史文化フォーラム in 白石

片倉小十郎景綱 ～ナンバー2の実像～

学会をリードする若手研究者が白石に集結！

12月14日、「片倉小十郎景綱」ナンバー2の実像」と題したフォーラムを中央公民館で開催した。
このフォーラムは、学会の最前線で活躍する若手研究者が片倉小十郎景綱をメインテーマに据え、戦国大名と最も重きをなす家臣「ナンバー2」との関係を検証。伊達政宗と片倉小十郎景綱を中心に、上杉家、武田家、大崎家といった諸大名との比較を交えながら、分かりやすく紹介しようといわれたものである。この日は、市内外から約300人が来場。熱心にメモを取る人たちの姿も多く見受けられ、関心の高さがうかがえた。



仙台市博物館 室長 編纂 菅野 正道さん

「再検証・片倉景綱」
片倉小十郎景綱の通説に疑問

菅野さんは、片倉小十郎景綱と伊達政宗との関係を、通説とは違った視点から検証した。伊達家の記録では、景綱は米沢八幡宮の神官の子と言われているが、その系譜を見ると、神官の子ではなかったことを説明した。景綱の父景重は、神職の娘と結婚したため神官の地位に就いたが離縁。景綱は、後妻との間に授けられた子で、その時はすでに父景重は神官ではなく、片倉家とは、代々神官の家柄で

「武田家臣団の成り立ち」
武田家にはナンバー2がない

小佐野さんは、武田信玄とその家臣団について講演。武田家は守護大名から戦国大名になった家で、守護大名家のナンバー2とは家宰（領国支配、家臣団統制、外交などあらゆる権限を代行していた存在）であったことにはふれた。そして、15世紀半ば過ぎ、守護代であった跡部氏がクーデターを起こそうとし、守護の信玄と家宰跡部とが対立したが信玄が勝利。戦国大名化への基礎となったことを説明した。



上越市公文書センター 公文書管理係長 福原 圭一さん

「上杉家のナンバー2・直江兼続」
イメージ通りのナンバー2

福原さんは、上杉家の直江兼続（樋口与六）が上杉景勝の側近を勤め、常に景勝とともに行動する、まさしくナンバー2であると説明。兼続は、低い身分にありながら、上杉謙信の跡目争いである「御館の乱」で景勝とともに戦った。その後、謙信の側近であった山崎秀仙が殺された「山崎秀仙惨殺事件」で、ともに命を落とした重臣直江景綱の家の名跡を継ぎ、直江姓を名乗ることとなると同時に、景綱の領地と家臣団（与板衆）、そしてその地位を獲得。兼続は内政だけでなく、狩野秀治とともに外交にも携わっていたが、秀治の病死をきっかけにひとり立ちし、ナンバー2の地位を確立したことなどを話した。



東北大学大学院 文学研究科専門研究員 小佐野 浅子さん

また、兼続の下に実務を担当する与板衆などがいたことにもふれ、「上杉家を現代の株式会社にならせると、謙信は社長であり実務もこなす、景勝は会長で、経団連などに出向き国政を行う、兼続は社長で、他社との交渉や自社内の統括をする。実務を担当する部下もいた」と上杉家における主君と家臣の関係を分かりやすく例えた。

「大崎家の外交と氏家吉継」
ナンバー2と外交

遠藤さんは、現在の宮城県北部を領していた大崎家の重臣である氏家吉継について講演した。氏家はもともと大崎の執事的立場の重臣で、その戦国末期の当主が吉継。吉継は、内乱を外交の力で沈静化させており、景綱同様、外交面で大きな役割を果たしていたと説明した。

続けて、天正14年にはじまる大崎合戦で、吉継の一派は他国の大名である伊達政宗を頼り、その結果、政宗は援軍を出すことにしたが、これは、吉継の要請があった点を指摘。また、天正16年に政宗は、自身に味方をした大崎家中に所領を認めているが、この背景にも吉継の関与が考えられると話した。このほかに、翌17年には大崎義隆の代理で、和睦交渉のために米沢の伊達政宗のもとを訪れ、彼がその外交力で味方の保障を取り付けていることが分かったと説明した。

結びに、「吉継がナンバー2であることと決定づける資料などは見つかっていないため、確固たるナンバー2がいたとは言えない」とし、今後、個々の事例をさらにひもといていく必要があるとの見解を示した。



弘前学院大学 社会福祉学部講師 遠藤 ゆり子さん

パネルディスカッション
「ナンバー2の実像」

講演会の後、福島大学人文社会学群行政政策学類准教授の阿部浩一さんをコーディネーターに迎え、講演を行った方々をパネリストに、ナンバー2の実像についてパネリストたちが諸大名の研究を通して考えを語った。

遠藤さんは、「大崎家にはナンバー2が誰なのかを記した資料自体がほぼ残っておらず、大崎家では外交を通して家臣団の信頼を得た氏家吉継がナンバー2に近い」、小佐野さんは、「武田家は内乱を治めたことで国が統一された国。国内のクーデターを未然に防ぐため、あえてナンバー2という存在を作らなかった」と話した。

また福原さんは、「上杉家には直江兼続という確固たるナンバー2がいた。その条件は実力があり、他国から認識され、当主・家臣から信頼されていること。これらが欠けるとナンバー2とは成り得ない」と話した。次に菅野さんは、「景綱も福原さんの言う条件を満たしている。しかし、当主の違いや家柄、家臣団の違いなどがナンバー2の果たす役割を決定する要因ではないか。ナンバー2とは、当主・家臣・時代などによって多種多様で、1つのイメージに確立するのは難しい」と話した。

結びに阿部さんが、「今後もこうした研究を進め、新たな歴史像を示していきたい。そして、多くの人に感心を持ってもらいたい」と締めくくった。